

葵 AOI

No.137

令和8年 新春

徳川美術館

THE TOKUGAWA ART MUSEUM



展覧会
紹介

P3~4

企画展

日本の神々 降臨



ご挨拶

P2

新年のご挨拶

エッセイ

P5

丙午
歳の始めに際し
熱田神宮宮司
千秋 季頼氏

研究ノート

P6

未知の絵画の鑑定
—陳佑筆
「満畦生意図」を
めぐって—

コラム

P7

大名家のお正月
殿様は忙しい！

展覧会紹介

P8

特別展
「尾張徳川家の雛まつり」

企画展
金沢文庫・蓬左文庫 交流展
「金沢文庫本
—流離う本の物語—」

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。 旧年中は格別のご厚情を賜り、心より御礼申し上げます。

おかげさまで、昨年、徳川美術館は開館90周年という節目を迎え、多くの皆さまに支えられてきた歴史と文化の重みを改めて実感する一年となりました。

また、従来より当館を応援してくださっている皆さまのみならず、初めて当館にご来館くださった多くのお客様をお迎えできたことは、次の節目となる100周年、さらにはその先の新たな100年間を見据え、皆さまとともに日本の美をつなぎ、未来へ継承していく新たな決意へとつながりました。

本年は、NHK大河ドラマ『豊臣兄弟!』やアジア競技大会をはじめとする各種イベントに合わせ、皆さまに新たな発見と感動をお届けできる魅力的な展覧会を多数予定しております。伝統を守りながらも新しい時代の息吹を感じられる美術館として、より多くの方々に楽しんでいただけるよう一層努めてまいります。

皆さまのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げますとともに、変わらぬご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

徳川美術館



令和8年度展覧会スケジュール

令和8年(2026)

- 4.18(土)～6.14(日) NHK大河ドラマ特別展 豊臣兄弟!
- 6.25(木)～7.20(月) 企画展 お能、はじめまして。
- 7.25(土)～9.27(日) 夏季特別展 武芸 サムライ・アスリート
- 10.8(木)～11.15(日) 特別展 ときめく箱
- 10.8(木)～12.13(日) 企画展 生誕140年 没後50年記念
旅する侯爵 徳川義親

令和9年(2027)

- 1.5(火)～1.31(日) 企画展 古写経 祈りの美
- 2.6(土)～4.4(日) 特別展 尾張徳川家の雛まつり
- 企画展 大名もあそぶ

企画展

日本の神々 降臨

令和8年1月4日(日)～2月1日(日)

名古屋市蓬左文庫 展示室

「^{やおよろず}八百万の神々」と呼ぶように、私たち日本人の生活の中には、多くの神々が存在しています。神々の起源や祀られている場所もさまざまで、神話に登場する神々や大陸渡来の神々、歴史上の人物が死後神様として祀られていることもあります。また学業成就・勝負必勝・商売繁盛や五穀豊穰など、神々にも「得意分野」があるとされ、日頃宗教を意識することの少ない人でも、人生の節目で一度は、神様に手を合わせたことがあることと思います。

徳川美術館には、尾張徳川家で信仰されていた神々に関する作品が残っています。尾張徳川家は江戸時代に作られた大名家であり、尾張徳川家の

歴代が祀ってきたのは、もともと尾張徳川家と関係の神々もしくは尾張国で祀られていた神々に限られていました。

日本の神話に登場する神々のうち、その中心に位置しているのは「太陽の女神」天照大神あまてらすおおみかみです。皇室の祖先神として重要視され、全国の神社の頂点を占めるのが、天照大神を祀る伊勢神宮であり、尾張徳川家では、天照大神を祀る熱田神宮への信仰が篤く、歴代が参詣し、神宮の造替事業を支援しました、神宮伝来の宝物に対して関心を寄せてきたことが、数多くの作品からもうかがうことが出来ます。



名古屋東照宮祭礼図巻総巻(部分) 森高雅筆 9巻の内 江戸時代 文政5年(1822)



白鳩・龍図軍扇(部分) 徳川義宜(尾張徳川家16代)所用 江戸時代 19世紀

尾張徳川家では、八幡神への崇敬が篤かったことも注目されます。八幡神は武運長久の神であり、徳川家では一族の守護神として信仰したことなどが、その尾張徳川家の八幡宮への信仰が篤かった理由に挙げられます。尾張徳川家が江戸市ヶ谷上屋敷内に祀った八幡宮の御神体「八幡大菩薩像」は、鎌倉時代に描かれた原本の写しで、原本とともに伝来しました。また八幡神の使いである鳩をあしらった軍扇や旗なども武運を祈る思いの表れであるといえるでしょう。

春日大社への信仰を物語る尾張徳川家の遺品に、「鹿島立神影像」(表紙)があります。春日大社の神の降臨を描いた作品で、尾張徳川家で、春日の神を祀る場で用いられたと考えられます。



日光東照宮祭礼図巻(部分) 江戸時代 19世紀

尾張徳川家で最も驚く信仰されたのが、徳川家康を神格化した東照大権現(東照宮)です。初代義直にとって家康は肉親である以上に、元和5年(1619)、大名では初めて東照社を名古屋に建立したことから分かる通り、神としての家康に対する信仰は篤く、義直筆の「徳川家康画像」や「神号 東照大権現」などが伝来しています。また年に一度名古屋の町を練り歩く盛大な行列、名古屋東照宮の祭礼を描いた画卷もあわせて紹介します。また死後に神として祀られた実在の人物として、学問の神様として信仰を集めた菅原道真と、歌会の場で神影が祀られた和歌の神様柿本人麻呂の2人を挙げるすることができます。本展覧会でも尾張徳川家に伝来した画像を紹介します。

今回の企画展「日本の神々 降臨」では、尾張徳川家に伝来した神々にかかわる作品を通して大名家における信仰、そして現在に続く人々の祈りの有り様を明らかにしていきたいと思います。新年の清々しい空気のなか、展示室で多くの神々との出会いがありますようにと願っております。

(学芸部マネージャー 並木 昌史)



熱田社参詣曼荼羅図(部分) 伝狩野賢信筆 二曲一隻 室町時代 16世紀

エッセイ

丙午 歳の始めに際し

令和8年、謹んで新年の御祝詞を申し上げます。

熱田神宮は今さら申し上げるまでもなく皇位の御璽^{みしるし}である三種神器の一つ「草薙神劍」^{くさなぎのみつるぎ}を御神体として奉斎^{やしろ}するお社です。その歴史は古く、第12代景行天皇の御子である日本武尊^{やまと たけるのみこと}が佩^はかれた神劍を、縁あってこの熱田の地にお祀りされたことに始まります。以来、実に1900有余年の歳月を重ねております。当神宮の御祭神は年間700万人にも及ぶ参拝者をお迎えになっておられますが、特にお正月は三が日だけでも、230万人の初詣での人々で賑わいます。また、1年の中で祭典・神事がもっとも多いのもこの1月です。元日の歳旦祭^{としがひめ}に始まり、11日の踏歌神事^{とうか しんじ}、15日の歩射神事^{ほしや}など、当神宮他数社でのみ執り行われる所謂「特殊神事」も斎行され、神事を奉仕する私も身の引き締まる思いで1年が始まります。

この度執筆の御依頼を受け、改めて尾張徳川家と当神宮の御縁について考えてみました。藩祖義直公の入府以来、歴代藩主は自らが治める尾張国に鎮座する当神宮を篤く崇敬され、折にふれ当神宮の造営事業に思いを寄せてくださいました。また、藩祖の父・東照神君は幼き頃、当神宮近くに身を寄せられていたこともあります。推測の域を出ませんが、その折、当神宮に参拝し、わが身、そして松平家の将来を祈念なされたのではないか、ややもすれば、私の先祖と境内で言葉を交わされたのではなかろうか、と想像豊かに思いを馳せております。さらに申し上げれば、名古屋城を一名「蓬左城」と称するのも、当神宮が古く「蓬莱宮」の美称を有し、都からみてお城が蓬莱宮(当神宮)の左(北)に位置することからの命名であり、お城と当神宮が尾張国の象徴であったことを窺い知ることもできます。

熱田神宮宮司

せん しゅう すえ より

千秋 季頼



昭和25年11月 奈良市生まれ
昭和48年 3月 皇學館大学文学部國史学科卒業
昭和48年 4月 熱田神宮奉職
平成26年11月 同神宮権宮司及び熱田神宮宝物館館長
平成30年 9月 同神宮宮司
令和 3年12月 愛知県神社庁長
令和 4年 7月 株式会社 神社新報社取締役社長

さて、この正月四日より、徳川美術館では「日本の神々 降臨」と題して企画展を開催なさると伺いました。「八百万の神々」ともいうように、我が国には天照大神様をはじめ山や滝、樹々に宿る神々に至るまで、多くの神様が存在します。また菅原道真公や家康公のように、偉人が神として祀られることもあります。いずれの神々もわれわれ人間の前に姿を現すことはありません。この姿を現さぬ神に見守られていると信じ、清き明き真^{きよ あか まこと}のころをもって畏敬の念を捧げてきた先人の心が、現代に至ってもなお日本人の精神として連綿と伝えられているのでしょうか。素晴らしいことだと思います。このように神様にスポットをあてた有意義な企画展を私も鑑賞させて頂くことを楽しみにしております。

是非とも気持ち新たに、新年の初参拝で見えない神を感じつつ、徳川美術館では美術工芸品を鑑賞しながら降臨した神々を感じ取られては如何でしょうか。

未知の絵画の鑑定 —陳佑筆「満畦生意図」をめぐる—

学芸員 加藤 祥平

海を渡り日本に伝えられた中国絵画は、古来、「唐絵(画)」と称され尊重されてきました。なかでも、足利将軍家の宝物「東山(殿)御物」の多くを占めた宋元時代の唐絵は、後世にも高い人気を保ちました。時代が下ると、交易により明清時代の唐絵も輸入されるようになり、徳川美術館にも多くの明時代の唐絵が伝わっています。

唐絵は、狩野派を主とする絵師によって鑑定されました。宋元時代の唐絵は、同朋衆であった相阿弥らが著したとされる、御殿飾りの手引書「君台観左右帳記」に収録される画家目録を手がかりに、既に名物として知られていた唐絵を基準に鑑定されていました。それに対し、明時代以降の唐絵がどのように鑑定されてきたのか、実はまだよくわかっていません。

当館の陳佑筆「満畦生意図」(図1)は明時代の唐絵で、狩野安信(1613~85)が画題と筆者を記した鑑定書「外題」(図2)が添っています。安信はどのように鑑定していたのでしょうか。

「古筆印判集扣帳 正徳三癸巳年九月吉日」(東京藝術大学附属図書館蔵)という絵画の落款を集めた典籍は、これまでほとんど言及されていない史料ですが、実は「満畦生意図」の落款部分が写し留められています(図3)。そこには実際の印や署名に加え、「おはりの出雲殿来 菜二有」と添え書きがあることから、「満畦生意図」は尾張家の分家・大久保松平家の初代松平義昌(1651~1713)の所蔵品であったとわかります。

さて、「古筆印判集扣帳」には、唐絵を主として絵画の落款部分を写した紙片が300枚以上貼られています。その中には安信が鑑定した絵画が、達仙筆「琴棋図」(相国寺蔵)や「唐絵手鑑 筆耕園」



図1 陳佑筆 満畦生意図 明時代 15世紀



図2 狩野安信外題

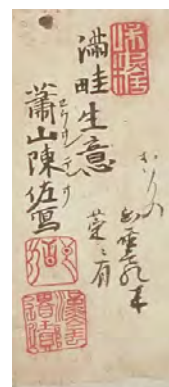


図3 古筆印判集扣帳(部分)
東京藝術大学附属図書館蔵

(東京国立博物館蔵)の珪観筆「山水図」など多く含まれています。また記された鑑定の依頼元から、大名家のほか狩野昌運(1637~1702)や奈須泉石(1648~1701)ら安信の門人が鑑定を取り次いでいたこともわかります。これらから、同書は、鑑定のために安信およびその周辺へ持ち込まれた絵画の落款の記録が、正徳3年(1713)9月にまとめられた書物と推測されます。当時多く流通していた明時代の絵画という未知の絵画に対して、安信周辺が落款や画題・画風を細かに記録しようとしていた様子がうかがえます。その一方、「陳佑」を「陳佐」と読み違えるなど、間違いも多くみられ、明時代の画論書が詳細に参照されていた形跡はあまりみえません。

従来の研究では、作品ばかりが対象となり、江戸時代の鑑定の実態については置き去りになっていました。今後も史料の精査によって、彼らの鑑定の実態がより明らかとなってくるでしょう。

大名家のお正月 殿様は忙しい!

江戸時代の一般の人々は、新年の準備で年末忙しかった分、年が明けると「寝正月」で、静かに過ごしたと言われています。ところが尾張徳川家の殿様は、江戸にいても、名古屋にいても、お正月は忙しか

ったようです。ここでは尾張徳川家の八代宗勝^{むねかつ}が名古屋で迎えた、寛保2年(1742)元日の様子を見てみましょう。

宗勝の起床は午前4時。まだ闇夜の中を湯を浴びて身を清め、髪型を整えると正月の行事の始まりです。一年の健康を祈って飲む屠蘇酒^{とそしゅ}や大福茶^{おおぶくちや}に続き豪華な祝い膳に向かいました。午前8時には、江戸からやってきた子息熊五郎^{むねちか}(後の9代宗睦)の使者や重臣たちから、年賀の挨拶を受けました。続いて家臣たちの年賀の挨拶を受けました。彼らは御殿の各部屋に集合し、宗勝が部屋の襖^{ふすま}の前に立つと襖が開かれ、集まった家臣たちが一斉に平伏する、といった所作が繰り返されました。宗勝はその後、年賀の使者の挨拶を受け、この日の公式行事は終了しました。宗勝は翌2日以降も連日家臣の年賀を受けたほか、3日には御謡初^{おんうたいぞめ}、7日には建中寺の参詣や七草の祝いなどの行事が続きました。尾張の殿様は將軍から御暇^{おいとま}を賜って尾張に帰国しましたが、名古屋城内で自由な時間を過ごしていたわけではなかったのが、正月行事からもわかります。

(学芸部マネージャー 並木 昌史)



葵紋散時絵懸盤・椀 伝紀伊徳川家伝来 江戸時代 19世紀

赤絵八仙図皿 五枚の内 江戸時代 18世紀

四季花鳥図屏風(部分) 伝狩野山楽筆 六曲一双の内 江戸時代 17世紀

特別展

「尾張徳川家の雛まつり」

令和8年2月7日(土)～4月5日(日)

会場：徳川美術館 本館

「桃の節供」と呼ばれる雛まつりは、春の訪れを告げる、華やかで心なごむ行事です。徳川美術館では毎年、雛まつりの時期にあわせて尾張徳川家ゆかりの雛飾りを展示しています。気品に満ちた有職雛や、婚礼調度のミニチュアである雛道具は、いずれも雅やかで、御三家筆頭の名にふさわしい質の高さを誇ります。これら江戸時代の品々に加え、明治から昭和にいたる尾張徳川家三世代の夫人たちの豪華な雛段飾りは必見です。

また、名古屋の豪商・富田家（屋号：紅葉屋）であ



有職雛（東帯姿）
貞徳院姫姫（尾張家 14 代慶勝正室）所用
江戸時代 19 世紀 徳川美術館蔵

つらえられ、復古やまと絵派の流れを汲む森村宜^{よし}稲^ねによって木彫彩色が施された雛人形を初公開します。豊島知子氏の婚礼に際して尾張の旧家・豊島家へ持ち込まれた雛人形をご寄贈いただきました。有職故実を重視しながらも愛らしく仕立てられた、旧家の雛人形をお楽しみください。

企画展 金沢文庫・蓬左文庫 交流展

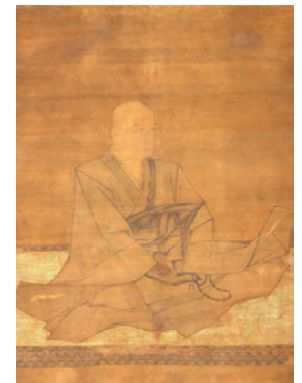
「金沢文庫本
一流離^{さす}う本の物語」

令和8年2月7日(土)～4月5日(日)

会場：名古屋市蓬左文庫

鎌倉幕府の執権北条氏の一族である北条実時は、和漢の貴重な典籍を国内外から積極的に蒐集し、それらを収めるために、「金沢文庫」と呼ばれる文庫^{ふみくら}を創設しました。文庫に収められた蔵書群は、のちに「金沢文庫本」と呼ばれるようになります。鎌倉幕府の滅亡後、「金沢文庫」は金沢北条氏の菩提寺である称名寺の管轄下に置かれ、同寺の遺産とともに、現代に至るまで守り伝えられています。

室町時代以降、「金沢文庫本」は、貴重であるがゆ



国宝 北条実時像 鎌倉時代 13 世紀
称名寺蔵（神奈川県立金沢文庫保管）

えに多くの権力者より求められ、散逸の危機に直面することとなります。「金沢文庫本」に強い関心を寄せた家康が蒐集した「金沢文庫本」を含む優れた古典籍は、後に尾張家初代藩主となる息子・義直^{する}へ「駿河御^お譲^{ゆづり}本」として受け継がれ、その多くは現在、名古屋市蓬左文庫に収められています。

本展は日本が世界に誇る古典籍「金沢文庫本」を受け継ぐ両文庫が連携して、蔵書を守り伝える営為とその歴史的意義を紹介するものです。

葵 徳川美術館 第 137 号

発行年月日：令和8年1月4日

編集発行：徳川美術館

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1017 TEL (052) 935-6262

<https://www.tokugawa-art-museum.jp/>

表紙

かしまだちしんえいず 鹿島立神影図 室町時代 16 世紀

春日大社の御祭神・武甕槌^{たけみかづちのみこと}命が、白鹿の背に乗って、茨城県の鹿島神宮から奈良の地に降臨した姿を描いています。日本の神には本来、姿は無く、本図では人の姿で描かれています。また人の目には見えない存在で、祭典や祈願の時には依代^{よりしろ}（目印）に降臨するとされてきました。



公益財団法人 徳川黎明会
活動支援基金寄附者名簿

—敬称略—

■ 法 人 ■

宗教法人 高岳院

宗教法人 政秀寺

株式会社名豊本社

(社) 茶道裏千家淡交会
愛知第二支部

株式会社山本油店

大雄山性高院

合同会社むらやま

名古屋徳川ライオンズクラブ

一般財団法人坂文種報徳会

(令和7年12月1日現在)



■ 活動支援基金のお願い ■

寄附の使途	徳川美術館および徳川林政史研究所の作品購入、収蔵品に関する 修理・研究調査・教育普及および環境等の整備拡充など
寄附金額	個人 一口一万円 法人 一口十万円 何口でも結構です。 所定の振込用紙で郵便局または銀行からお振込みいただけます。 振込用紙をご希望の方は当館寄附係まで御連絡ください。

公益財団法人 徳川黎明会

活動支援基金寄附者名簿

—敬称略・五十音順—

■ 個 人 ■

ア	赤堀康彦 秋田節子 浅井みちよ 朝岡多磨美 麻生由香 阿部隆夫 雨宮秀樹 有賀和子	コ	金 リンダ リ 後藤宗理 小林春子 小宮山敏和 近藤昭彦 齋藤恵美 坂本達彦 櫻庭茂大 佐々木剛志 佐藤孝之 澤 貴弘 柴田耕志 清水恵五 白根孝胤 新崎 鈞 新崎美至子 鈴木要一郎 高木俊輔 高山慶子 滝 正 竹内美智代 千葉晃泰 辻 智美	ト	徳川喜壽 富田和枝 富田 茂 長尾茂行 長澤大悟 長澤弘宣 南雲和江 新美達也 西尾千歳 西 光三 西田佳子 西村敏子 橋本暢子 服部はるみ 平田米男 平塚泰三 広瀬千明 深井雅海 深谷比呂美 福澤宏昭 伏屋重晴 堀井邦彦 堀井久美子 前田種男 松尾美恵子	ミ	水谷鎮夫 宮島宏子 宮田励司 村井俊哉 村上賢瑞 持留宗一郎 八神 基 柳澤由希 山崎久登 山本英二
イ	飯岡正毅 井口正俊 石山秀和 伊東與有三 岩下哲典 上野秀治 内田裕美 大石浩哉 大崎 晃 大島真理夫 大野淑子 岡田健児 奥川忠洋 笠井 朗 加藤衛拡 岸 拓也 貴布根楯雄	サ		ナ		ム	
ウ		シ		ハ		モ	
オ		ス		ヒ		ヤ	
カ		タ		フ			
キ		チ		ホ			
		ツ		マ			

(令和7年12月1日現在)